

ディケンズの古さと新しさ

長崎 勇 一

1. ぼくとディケンズ

ときどき、おしゃべりの癡れんにとりつかれるぼくは、昨年のあるとき、若い友人に、これから大いにディケンズを読むつもりだ、と口をすべらせつついでに、仕入れてまもないディケンズの奇妙な逸話を披露して、ひとりで盛んに面白がった。その逸話をぼくはいま思い出すことができない。だから、過去の時点では、友人をさほど面白がらせたはずがない。「そうですね、そうですね」と、単調につぶやく友人のレフランを、そして、彼のいくぶんか当惑した表情を、ぼくは思い出すことができる。彼が英文学の専攻者ではなく、評論家志望の近代日本文学に詳しい篤学の青年である、と注釈すれば、ディケンズと文学好きの日本の青年たちとの距離が、どのように、かけはなれたものであるか、たやすく推定できるはずである。

講壇に根をおろした文学研究者が、部外の文学研究者には無縁の、非職業的な文学愛好者にはさらに無縁の、精緻な研究を偏執的に推しすすめる日常生活は、正当な尊敬に値する生活であり、それは時にはひろい場所での、社会的・文化的な効用を発揮する基盤であることを、ぼくは疑ってはいない。それゆえ、ディケンズの文学と人間像の研究が、文学を愛する若い人たちのアクチュアルな関心をそそらず、或は他部門を専攻する英文学研究者に無視されるとしても、かくべつに驚くには当たらない。熱心なディケンズ研究者が、これを嘆くのは勝手であるが、それも度をすぎすと、まさにディケンズ世界の人物になりきることになる。だが、幸いにも、彼は

歎くには及ばない。最近二十年間にみられる十九世紀英文学の再評価に伴って、ディケンズ研究は復興した。ぼくの如き新参の入門者は「必読文献」の過当割当てに茫然とする状態である。

そもそも、ディケンズ全集を読破する「仕事」は、ぼくには莫大な時間がかかりそうである。語句の文法的な詮索を省略して、少々の誤読を覚悟の上で、つまり非学問的で、娯楽的な読み方を心がけるとしても、Oxford版の挿絵入り二十一冊本の各巻は、三百余頁から八百数十頁におよぶ細字の大冊本である。ペンギン文庫の現代物を気易く読む調子にはなれそうもない。ヴィクトリア朝の読者は、これらの各巻が、それぞれ一年から二年にわたって、月刊分冊や雑誌連載として公刊されるのを待望して、読みふけたという。中産階級にとって閑暇にめぐまれ、刺激的な娯楽に乏しい、よい時代であったにちがいない。彼らはたとえ二十一冊本をかかえこんでも、現代日本の或る種の人々が吉川英治全集や山本周五郎全集を読みとばす気分とは、よほどへだたりのある念入りな愛情をこめて、読みつづけたであろう。現代のイギリスで文学研究者に属しない、青年たちや働きざかりの壮年サラリーマンのうち、何パーセントの人々が、ディケンズ小説群のどの程度の量を、どの程度の興味をもって、読んでいるのか不明である。現代の多忙な刺激は日本もイギリスも似た状況であろう。重厚なイギリス人といえども、十九世紀小説の愛好家を除いては、おそらく、百年前のかさばった小説本を呑気に愛読しているとは思われない。彼らはそれ以外の気の利いたアクチュアルな読み物に不自由しないだろう。

十八世紀から十九世紀までの西洋小説のうちで、ぼくらに読みつがれる近代古典とはどのような条件をそなえるものであろうか？ ぼくにはこの大問題を正当に論ずるための準備が欠けている。だが、ディケンズと自分とのかかわり合いを確認するために、この問題を棚あげすることはできない。若年の頃から横びんに白毛のまじる今にいたるまで、翻訳小説を読みちらしてきた体験を唯一の拠りどころにして、近代古典の読者の心を推測

してみよう。

魅力ある近代古典とは、第一に、人間の本质にふかく立ちいつていること。——普遍性にかかわる洞察は、地域と時代と、言語上の誤差を超えて読者に認識の喜びと、自己の実存感を与えてくれるだろう。(作例は列挙するまでもあるまい)

第二に、作中主人公のきわめて個性的な、或は典型的な生き方が示されていること。——読者は主人公のつよい個性に接して、羨望・同調・反撥など、読者それぞれの資質と条件によって、なんらかの倫理的な感銘をうけるはずである。また、正確に描写された典型的な主要人物を通じて、社会階層のひろがりと深さを感じ得るだろう。(『赤と黒』、『アンナ・カレーニナ』、『罪と罰』、『白痴』、『嵐ヶ丘』の個性的な主人公、また、バルザックの諸作品に登場する大型人物と、典型的な旁系人物群)

第三に、作中人物群の多様性が説得力の充分なリアリティを具えており、作者の人間解釈が個性的でありながら、寛容であること。——読者は己の個性と時代的な条件に、それらを照応させて、自他の生き方を省察する手がかかりを得るだろう。また、小説世界の人物群像を通じて、人間の複雑性について興味を刺激されるだろう。(『トム・ジョーンズ』、『戦争と平和』、『従妹ベット』などの大世界や、『自負と偏見』或は『ボヴァリー夫人』の小世界の住人たち)

第四に、主題が普遍的な永遠性をもつこと。例えば、ギリシャ悲劇の流れをひいて、人間の可能性と運命との相剋、人間心理の内奥にひそむ神と悪魔との相剋、或は、より近代的な性格を濃厚にして、個人と家系、個人と歴史、個人と組織などのからみ合い、また、対立相対の相のもとでなくて、個人の実存の究極的な意味を問うことなど。……さらに列挙できそうに思うが、主題項目の一覧表を示すことは、ぼくの目的ではない。要するに、個我の意識に立脚する十八世紀以後の小説は、個性不在の物語の世界を構築することを当面の目標とせず、個人の存在の意味を、さらに個性

を通じて人間性の本質的な意味を、作中人物と読者に問いかけてきた。そして、この作者の姿勢が主題を生み出す動因であった、と確認すれば足りる。

第五に、近代古典の名に値する大小説 (Major Novel) は、第一、第二、第三の条件をすべてをそなえた上で、或は、少なくとも第一と第二条件をそなえた上で、(主題の意匠は必ずしも壮大を要しない。人間の生態がみごとに描ききれている作品ならば、人間存在の意味は必然的に現われる。オースティン女史の小世界の如し)、骨太のプロットをもっている。骨太のプロットとは、事件が人間をあやつる経過ではなくて、性格と人間性から織りだされる諸事件の緊密な経緯が、人生の大河を構成するものである。

ディケンズが大家であり、いくつかの代表作が近代古典の名に値するとすれば、以上の諸条件の全部または大部分をみたすべきである。卒直に言って、ぼくは近代古典としてのディケンズに若干の疑義を抱いている。

いままでのところ、ぼくは彼の忠実な読者ではなく、かつて、痛切な関心を抱いた覚えがない。青年時代のぼくにとって、彼の存在は(十九世紀の西洋の作家に限っていうと)ドストイエスキーやトルストイ、スタンダールやバルザックほどの比重を占めることはなかった。まったく、彼は関心の埒外にあった。その頃、*Christmas Carol* と *David Copperfield* の一部分を、研究社版の「小英文叢書」で読んだはずであるが、それは英語の勉強だけの意味であった。

さかのぼって、中学生のぼくは、『オリヴァー・トウィスト』と『二都物語』を、訳本で一応おもしろく読んだと記憶する。しかし、前者の不幸な少年の冒険は、『宝島』のスリル感に及ばず、後者の人道主義とフランス革命の印象は、ヴィクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』(豊島与志雄訳)の感激にくらべると、かなり淡い記憶になっている。少年のぼくは、『レ・ミゼラブル』を涙をこらえながら読み、余勢をかって、『一七九三年』の訳

本をさがしだし、フランス大革命の原型的な知識を、感銘して受けとった。

このような私的な読書歴を披露するのは、本稿のはじめに記した一挿話と呼応する意味である。英文学に親しまぬ日本の熱心な文学青年や、かなりひろい知識をもつ文学研究者までが、ディケンズになぜ親しみをもたないのか、(翻訳の少ないサッカーに至っては、さらに縁遠いにちがいない)——その理由は、第一にディケンズが、十九世紀ロシアの大作家ほどに深刻壮大な人生観と世界観に欠けており、第二にフランス・リアリズムの大作家には、あまりみかけない誇張した戯画調と戯作者の態度をそなえているという先入観からではないか。(バルザックにも戯画的な描写はあるが、ディケンズほどに誇張していない、と言える)

この先入観は、ディケンズとの付き合いがあさいぼくには、それほど的はずれの意見であるとは思われない。

‘*David Copperfield*’ (1849~1850) は、作者の最も愛した作品である。(Of all my books, I like this the best.....like many fond parents, I have in my heart of hearts a favourite child, and his name is David Copperfield.—第二版序文)

彼はまた、初期の諸作品 (*Pickwick Club*; *Oliver Twist* その他) の戯作調と感傷性に伴う、構成力の弱さを克服するつもりで、自伝的な素材をリアルに再構成しようとした、とも伝えられる。

例えば、チェスタートン (Gilbert K. Chesterton) はすでに古典的な作品論とみられる著書のなかで、得意の逆説的な表現を使って断案した。

「ディケンズはこの著作では、新しい種類の本を書こうと、本気でやっており、その壮挙たるや、ほとんど騎兵の突撃に等しいほどである。彼はリアリスティックになろうとして、浪漫的な試みをしようとする」

(In this book Dickens is really trying to write a new kind of book, and the enterprise is almost as chivalrous as a cavalry

charge. He is making a romantic attempt to be realistic.)⁽¹⁾

この作品が最も有力な代表作である、という通説に、ぼくは異議をとこなえるつもりはない。また、十九世紀イギリス小説の傑作という定評にも同意する。ただし、これが「世界の十大小説」の一篇だという、Maughmの選定について、ぼくは大いに考えこんでしまう。とても承服できそうもない。モームは出版社の依頼をうけて「気まぐれにえらんだリスト」だというが、それにしても、わがまますぎる。(十篇の内訳は、英四、米一、仏三、露二。唯一の十八世紀物は『トム・ジョーンズ』で、お国自慢の形跡は歴然としている)

ぼくは『デヴィッド』(以下この略称による)を近代古典の条件に照合する場合、これを規模の大きなリアルな人生絵図とみて、また、多少の条件つきで、骨太のプロットを珍重して、近代古典として推せんしよう。だが、「世界の十大小説」となると、話は別である。(十篇にしぼるという企画そのものは無茶にきまっている。仮に二倍の篇数にふやすとしても、——?) 果して、『デヴィッド』はそれほど立派な大小説であろうか?

この疑惑について、潔癖な文学青年ならば、たぶん、その理由をただちに了解してくれるだろう。ディケンズが即興的な戯作調と感傷性をふりきったつもりで、制作したという『デヴィッド』のなかに、露骨なメロドラマ技法(特に後半部)が残存している。誇張の人物戯画が次々に陳列される。回想風の注釈には感傷たっぷりの言葉が臆面もなく盛りこまれる。そして、抽象的な思考によわかったらしい作者に、無理な註文と承知しているが、問題意識の通俗性が、ぼくの不満をかきたてる。

『デヴィッド』にからまる、これらの不満は、いわゆる「まじめな」読者の言い分であって、作者は研究者や文学青年の注意をひくために、書いたのではなかった。ディケンズは小説を理屈なく楽しむ読者のための、大衆作家であったことを、研究者は銘記しておかねばなるまい。研究者の立場

としては、ディケンズが大衆のための通俗作家でありながら、本来の意味の芸術家として、どの程度に、どのような方法で、通俗性を超えていたかを探求することになる。(と言っても、ぼくには大衆文学の通俗性それ自体の研究を、おとしめるつもりはない。例えば、わが国の「思想の科学研究会」の諸氏が、かなり以前に吉川英治の「宮本武蔵」を、最近では桑原武夫氏の主宰する共同研究会<京大人文学研究所>の同人・橋本峰雄氏が、中里介石の「大菩薩峠」を、主として社会心理学の角度から、作品の本質と読者の反応を精細に分析した仕事は、立派に有意義な業績であった)

では、ディケンズはどのように通俗性を超えているのだろうか？ いまのぼくには断案をくだす資格はない。また繰りごとの弁解をしなければならぬが、彼の全集どころか、主要作品の数冊さえも、ぼくはまだ読みきっていない。最初期の‘*Sketches by Boz*’ (1836) と ‘*The Posthumous Papers of the Pickwick Club*’ (1836~37) は拾い読みの程度であり、(断片的な戯作なので、それだけでも体裁と内容の特徴はつかめる、と言えるかもしれないが) 初期の代表作であるらしい、‘*Oliver Twist*’ (1837~39) は、Arnold Kettle の批評に刺激されて、数年前に原文で読み直した。中学時代の翻訳読みの印象を相当に更新したと思うが、Kettle の批評の方がぼくにはよほど面白かった。(研究社本の註釈者、沢村寅二郎氏・山本忠雄氏のおかげで、語学力の向上については有益であった、と告白しておく)。

『デヴィッド』以後のものでは、‘*Hard Times*’ (1854) を、ぼくは F.R. Leavis の批評にひかれて、辛抱して読んだ。数多くのディケンズの小説群から、リーヴィス博士ほどの鑑識家が、なにゆえ、主題の意図を性急に示す生硬な作品をとりあげて、イギリス小説の「偉大な伝統」に編入したのか、納得できかねる。素直に小説の面白さを味う読者ならば、かような選択をしないだろう。リーヴィスはディケンズの戯作調を大いにきらっているので、*Hard Times* (『やりきれない時代』) にあきらかな、反実利主義の告発と格別の倫理臭に稀少価値をみだして、その表現効果を過度に評価

しているようだ。この作品が ‘a completely serious work of art’ だからといって、ディケンズの ‘all the strength of his genius’ を代表しているとは限らない。

(3)
後期の傑作の一つといわれる、『大いなる遺産』*Great Expectations* (1860~61) については、日高八郎氏のみごとな新訳を部分的に参照しながら、かなり丁寧な読み方をした。この小説のすぐれた描写と推理小説的に入念な構成を、ぼくは人並みに楽しただけでも、読了後の印象を友人に語りたと思うほど、感激したわけではない。なにか言わねばならぬとすれば、文学技術の問題に落ちつくことになるだろう。もちろん、青春期を遠いむかしに終えた初老の読書人が、読みおとした有名小説に接したとき、やすやすと感激するはずがない。

もっとも、『大いなる遺産』は読者を積極的な意味で感動させる性質の小説ではない。すなおな感受性を除いては、凡庸といってよい一青年（主人公 Pip）が、匿名の後援者を、美しい養女（Estella）をもつ富裕な老婦人（Miss Havisham）だと誤認して、その人の遺産を目当てに紳士気どりの俗物になりかけたとき、まことの後援者（Magwitch）が現われる。その人物は、ピップが貧しい孤児の頃、偶然にも脅迫されて、わずかな助力をしかたなく施してやった脱獄囚だとわかる。ピップはわが身の安全をめざす小心の打算から、マグウィッチに国外脱出をすすめて、その援助をする。脱出は失敗して、マグウィッチは死ぬ。その過程で、ピップは俗物的な利己心をすてて、質朴な精神をとりもどす。嬌慢な美少女エステラは結婚に失敗して、柔和な落ちつきを身につけた大人に成長し、ピップと結ばれる可能性を示す。

主筋の結末から主題を性急に割りだして、虚飾の幻影から正しへ現実認識と正しい生活へ、健全な回心を強調するもの、と判断することは、まったくの誤りでないにせよ、ゆきとどいた解釈ではない。現在の通説では、その主題の重みは、ピップやエステラの好ましい回心にかかっているの

はなくて、幻滅感の強調にある、という。

ほくも通説に賛成する。たしかに、この小説では、『デヴィッド』に登場する Micawber 氏や乳母 Peggoty のような、あかるい滑稽感をそそる人物はみかけない。『デヴィッド』の喜劇的な部分は、日常的な軽みをもっているが、『大いなる遺産』に散見する滑稽感、グロテスクな不調和と、皮肉な表現によるものである。細部の検討は別の機会にゆずり、二例をあげるにとどめる。

第1章では、沼沢地方の墓場を背景に、必死の思いの陰相な脱獄囚が登場する。彼と応対するピップ少年は恐怖と狼狽にとらえられながら、子供らしい拡大鏡で、その印象を描写する。読者は少年の窮状を憐みながら、大人の眼には誇張としか思われぬ、その印象描写の奇妙な迫真性におかしみを感じる。いわば、暴力場面の教師が渾名をつけられるおかしみに類する。第31章では、素人芝居の「ハムレット」の情景が、とぼけた注釈をあしらって描写される。情景をみるピップ少年の眼を、無邪気にみせかけて、作者の扱いは意地わるである。

1941年、Edmond Wilson のディケンズ論 (*The Two Scrogos*) が口火になって、ディケンズの「気味のわるい性癖や、荒涼とした性癖」(the macabre or savage element) が注目され、特に後期作品から陰気な暗い面を摘出する批評活動が行われてきた。⁽⁴⁾

ディケンズ作品の「暗い面」の摘出は、ほくの先入観に動揺を与えた。Gissing のいわゆる 'Humour and Pathos' の評語を、ほくも大勢にならって、最初期の作品にだけ、当てはめるべきであろうか、だが、肝心の作品をよまずに、批評の大勢に従う軽薄は、自戒しなければならない。ほくのディケンズ軽視と疎遠は、戦後の新しい批評・研究の一端に刺激されて、いくぶんか修正され、ほくとディケンズとの距離は迫りはじめた。だが、伝説的な大作家の正体と力量を、わが眼でたしかめたいと思うまでには、ながい時間が経過した。たぶん、多数の英文学研究者の方々がそうである

ように、ぼくには、かさばったディケンズの長篇小説よりも、当面の必要のために、読まねばならぬ本が沢山ある。それでも、どうやら『デヴィッド』を通読して、『寂しい家』*Bleak House* (1852~53) を三分の一ほど、読みすすめたところである。

ディケンズの後期作品の「陰気な暗さ」は、若干の個人的事情のほかに、法制と社会施設の不備に対する公憤が主因である、という説が優勢である。果して、その通りなのか、いや、「暗さ」の原因よりも、「暗い怒り」の内容がどの程度に、どのような技法で、表現されているかを、自分の眼でたしかめる方が先である。その確認の程度が、彼の通俗性と作家精神とのかね合いを、検証する手がかりになるだろう。ユーモアと哀愁ではなく、暗い怒りと喜劇性という主調音は、大きな力でぼくをひきつける。ディケンズの後期作品のなかに、この主調音を確認できるならば、そのときこそ、ぼくは彼を大いに弁護しなければならない。むろん、その決定までには、充分な時間をふりむけねばなるまい。

2. *David Copperfield* の問題点

『デヴィッド』は、おそらく、衆目の認めるように、ピカレスク小説の変種であって、正統な意味での発展小説（又は教養小説、*Bildungsroman*）ではない。

デヴィッドは少年から青年期に至っても、自分と世界との関係を積極的に意味づけることはなかった。彼は受け身の姿勢で対人関係をきりぬけている。また、ベツシー伯母 (Aunt Betsey) の親切な扶養をうける孤児として向上心と独立の気概を失わず、一本立ちの作家になったが、精神的な完成をめざすための理念を追求することはなかった。彼の人間観は対人関係による失敗 (Dora の美貌と無邪気な気まぐれにひかれて結婚、Steerforth の虚無的な破壊性と、誤った紳士教育に由来する利己心を感知できずに親交を結ぶ) によって、経験的に深められる。だが、Agnes の好意に

ひそむ恋情を、結末部に至るまで、悟ることができない。このように曇った眼をもちながら、作家になれたのは、不思議である。(作者がアグネスを聖女のように描いている点にも、問題がある。愚かな‘Child Wife’ドラマに生彩を与える反面、作者はアグネスの性格描写を過度に抑えているのかもしれない。或は知的な若い女性の描写は、作者には不得手だったのか?)

要するに、デヴィッドには発展小説の主人公に必要な、理念の追求力という資質が欠けている。ディケンズの学歴の貧しさと人物描写の細密な具象性好みから判断すると、彼は素質的にはいわゆる「みる作家」であって、「考える作家」ではなかったらしい。最初期の作風を持続すれば、非凡な風俗小説家に終わったであろう。後期作品の「気味のわるい、陰気な暗い」変貌が正当な評価であるとすれば、みる作業と、考える作業とを、融合した完璧にちかい大作家の位置に到達したといえるかもしれない。

大胆に附言すれば、十九世紀までのイギリス小説家たちは、性格小説を本領と心得て、成果をつみあげたが、ドイツ流の理念追求の発展小説を、また、フランス流の情緒の発展史(例えば、ルソーの『告白』*Les Confessions*, 1770. や、フローベールの『感情教育』*L'Education Sentimentale*, 1869.)をほとんど生みだすことができなかった。ぼくの不完全な知識では、観念的な発展小説として、Pater の『享楽主義者マリウス』*Marius the Epicurean*, 1885 をあげるだけである。或る理念を提示する小説として、Wilde の『ドリアン・グレーの画像』(*The Picture of Dorian Gray*, 1891) や、Hardy の諸作品を列挙できるとしても、それらは理念を、個人の発展史のなかでとらえているのであるまい。とすれば、Samuel Butler の『万人の道』*The Way of all Flesh*, 1903. が、十九世紀末に完成されていた事実は珍重に値する。

『デヴィッド』がピカレスク小説風の人生遍歴図絵に分類されるとしても、むしろ、文学価値が低下するわけではない。また、『デヴィッド』は、

文学技術の未熟な挿話展開式のピカレスク小説ではない。それは緊密な構成をもつ長篇小説である。伏線の用意について、三例だけを指摘しよう。

デヴィッド少年は乳母の実家で、初めて幼ないエミリー (Emily) と友達になる。デヴィッドは少女が貴婦人にあこがれていることを知る。エミリーは自分だけでなく、家族一同が紳士・貴婦人の身分になれるとよい、そうすれば嵐がきても心配ないし、ほかの貧しい漁師が嵐にあつて困ったら、お金をだして助けてあげたい、と語る。彼女の希いは虚栄からではなくて、優しい性質からだつた。(3章) / 娘ざかりに成長したエミリーは、ステイヤフォースの「貴婦人にしてあげよう」という甘言にのつて、家出をする。(31章)

次の例は、伏線と事件とのスペースが適当に短かいので、その効果は初心の読者にもあきらかである。

デヴィッド青年は、老漁夫 Mr. Peggotty (乳母の兄) が傷心のエミリーをつれて、オーストラリアに移住する直前に、エミリーに元の許婚者ハム (Ham) の伝言をつたえる。彼女の感謝にみちた返事を、デヴィッドはハムに手渡すために、ロンドンから漁師町の Yarmouth へ馬車を走らせる。空模様は陰悪になる。

デヴィッドも、馭者も、こんなひどい雲の往き来をみたことはなかつた。馭者は言う。

「わたしも、いまみたいな空模様をみたことはありませんよ。あの風ときたら、ひどいもんです。海では、おっつけ、わるいことが起きますぜ」その翌日、正直すぎる青年漁師ハムは、難波船の乗客を、しかも、エミリーを誘惑して棄てた、ステイヤフォースを助けようとして、水死する。恋敵も死ぬ。(第55章)

つぎに最も慎重に扱われた伏線を紹介しておきたい。Canterbury 市の

弁護士 Wickfield の書記 Uriah Heep は、悪計をめぐらして、主人を窮地におとし入れ、法律事務所の共同経営者に成りあがる。それまでのうちにウィックフィールド氏は身心ともに衰える。その娘、アグネスはかなり以前に、父の衰弱がユライアの存在に原因するらしいと、推察はつくが、真相をつかんでいない。彼女が心配に耐えかねているとき、親愛の友デヴィッド青年が来訪する。そこで「父の様子がなにか次第に変わってきたのに、気づいていらっしゃるか？」（“Have you observed any gradual alteration in Papa?”）と尋ねる。デヴィッドも気がついてはいるが、原因はわからない。アグネスは「ユライアのせいですわ」（“By Uriah”）と言うだけである。（第19章, The Oxford Illustrated Dickens 版の p. 277）

この真相は、その会話から約四百六十頁も読みすすんだ先で説明される。（第52章, Oxford 版の p. 741~760）

デヴィッドの年長の親友 Micawber が、ユライアの奸謀を暴露する白熱的な場面がくるまでに、デヴィッドの生活や、その周辺に、いくつかの重要な事件が発生し、諸人物の関連状況が推移してゆく。その間に読者はユライアが法律事務所の共同経営者になって、貫禄を増し、ウィックフィールド氏の健康が悪化した様子を見ている。読者は両者の間に、なにかの秘密があるらしいと察知して、アグネスの不安な告白から、問題の解明まで、四百数十頁の間その関心をすてずにいる。また、読者は陰険なユライアがアグネスに野心を抱いていることを、知らされて、その成り行きに気をもむことになる。

「彼ら読者を笑わせ、泣かせ、期待させよ」（“Make 'em laugh. Make 'em cry. Make 'em wait.”）という大衆小説作法の教訓を、ディケンズは抜けめなく活用している。

デヴィッドの人生行路がこの小説の主筋 (Main Plot) である。一人物の人生行路は、諸事件や諸人物とのふれ合いから成りたっている。一人物

が Plot の行動主体であるならば、他の諸人物の人生行路は、主人公の人生に直接の関係をもつ場合に限って、叙述されるのが当然である。だが、読者大衆の嗜好は、長篇小説に対してスリルに富む複雑なストーリーを要求する。主題の質的な重要性や、印象の統一的な効果を、高級な読者と文学研究の専門家は常習的に問題にするし、また、それは正当な小説鑑賞・研究の態度であろう。だが、通俗の好奇心はそれらの点に集中されはしない。ディケンズは highbrow な純粋小説家ではなく、大衆のために書いた小説家であった。しかも、十九世紀イギリスの、特に前半の時代では、精緻な小説論は展開されておらず、作家の芸術家としての自覚も浅かった、とみななければならぬ。

『デヴィッド』の主筋 (Main-Plot) に、直接に介入する三つのワキ筋 (Sub-Plot) が用意されており、さらに三つの重要度のよわいワキ筋が平行的に附加されている。

直接介入のワキ筋は、——(1) 書記 Uriah Heep と弁護士 Wickfield にからまる Uriah の陰謀事件→(Betsy 伯母の財産と、David の生活に影響する。また、Micawber と David 及び Uriah の相互関係をふくむ。)

(2) 背徳虚無の青年紳士 Steerforth と世間知らずの娘 Emily の駈落ち事件→(Peggotty <David の乳母の兄> の養女搜索と David の助力、Ham 青年と Steerforth の溺死につながる)

(2) の補足——この過程で、Steerforth の母の階級的な独善性が批判的に提示され、S. 家の寄寓者 Rosa Dartle の、Steerforth に対する倒錯的な秘密の愛情が明らかにされる。Rosa のつよい個性は、それ自体一つの短篇に仕立てられるほどの実質もっている。彼女は Steerforth の身边に陰惨な影を加える役割からはみだしそうな気配を示す。例えば、Emily が Steerforth に捨てられて、ロンドンの女友達 Martha の部屋にかくまわれているとき、Rosa はその隠れ家をたちまち突きとめて (手続き不明!)、Emily の身のほど知らずの恋を難詰する場面 (第50章) がある。これは安

直なメロドラマ臭を帯びており、主筋とワキ筋の結合をかえって弱める作用をしている。Rosa のはげしい気性が爆発して、かよわい Emily がおびえるとき、芝居の舞台ならば、一つの見せ場になるであろうが、近代小説のリアリズムからみれば、てれくさくて頂けない情景になる。これを臆面もなく描くところに、作者の通俗性の一端が現われる。

(3) Peggotty 乳母と馭者 Barkis との結婚 (Plot としては軽いものである。この人間関係は、David の成長過程に、直接にはなく、間接的な影響を及ぼす意味で、主筋とは区別して扱うべきであろう。

平行的なワキ筋 (主筋の進行に、きわめてわずかな関係しかもため Sub-Plot。割愛しても主筋は進行できる)——(i) Strong 博士と Annie Strong 夫人及び Annie の従兄 Jack Maldon、この三者の愛情関係 (Strong 博士は Canterbury 市の私立学校長で、David の恩師であり、Agnes の父 Wickfield は博士の顧問弁護士である)

親子ほどに年のちがう夫妻は愛し合っている。夫人の母 (Miss Markleham) は娘が家の貧困を救うために老校長と結婚したものと思こんでいるらしい。そこで過度のでしゃばりを発揮して、不屈きにも人妻の娘を Maldon と接近させようとする。Maldon は無責任の生活無能力者で、Annie に遊びの恋を仕掛けている。Annie と Maldon の醜聞が博士の知人間で噂される。David もその醜聞をなかば信じて心配する。結局、Betsey 伯母の食客で、知恵足らずの奇人 Dick の無邪気な働きによって、醜聞は無根の当て推量と判明する。このワキ筋は、それ自体で独立の短篇に組みたてられる重さをもつ。従って主筋の進行を停滞させる夾雑物になる。

(ii) Betsey 伯母と前夫との関係。(Miss Betsey は五十年輩の気丈で果斷、親切な正義家のくせに、毒舌好きの独身女性である。彼女に青春のロマンスがあったとは、甥の David にも、読者にも、考えつかぬように描かれている。だが、Betsey は若い日に、恋愛結婚に失敗、放埒な夫と話しの上で別れた。その後、男は身をもちくずし、Betsey の住居をかぎつけ

て、時々、金をせびりにきた。Betsey にはなんの弱みもなかったが、厄介払いの気持ちだけで、その都度、小金をめぐんだ。男は病み、Betsey の世話でロンドンの病院に入り、そこで死んだ)

David はこの男に、二度出合う。最初は、学校を卒業した年、Betsey の好意で小旅行をすませた後、代言人見習を志望のため、彼女に伴われて、ロンドンの Spenslow 法律事務所を訪ねるとき、「卑しい感じの、みすぼらしい服装の男」(a lowering ill-dressed man) が、彼らのあとをつけてくる。伯母はその男に金をやって追いはらう。(第23章, Oxford 版 p. 348~349)

二度目、Betsey は Dover からロンドンに移転して、David の住居近くの借家に住む。或る夜、David は伯母の家を訪ねる。庭でその男が立ったまま、酒を飲んでおり、伯母が愚痴を言いながら、彼に金を与えるのを見る。男の去ったあとで、伯母は David に問いつめられて、‘...it’s my husband.’ と事情をあかす。(第47章, Ibid., p. 687-689)

このように、David が彼をみるのは二度であるが、そのほかに、Dick のみた怪しい人物として、(第17章, p. 249-250 に初出) また、結末部にちかく、Uriah の悪事が摘発され、David の愛妻 Dora が病死した直後、Betsey は、あの男が病院で死んだことを、David に語る。(第54章, p. 781-782)

つまり、Betsey の前夫(名前は伏せてある)は、直接の登場二回、会話のなかに二回、計四回の登場である。登場する章は、Ch. 17, 23, 47, 54 である。

ぼくがこのように念入りな確認をするのは、作者ディケンズが、このワキ筋に慎重な布石をした意図を、あれこれと思いまどうからである。簡単に考えると、これをとり払っても、主筋の進行には些かの影響もない。また、風変りの独身女性 Miss Betsey Trotwood の性格描写に不足はない。

しいて理由づけをしてみよう。① デヴィッドの見た謎の男を、は

じめに発見したのは、ぼんやり者のようにみえる老紳士ディック氏であった。彼はストロング夫人の冤罪をはらす機会をつくった人物でもある。平素はきれぎれの身上記録の作製を日課とし、小児の如く、風あげに興ずる老紳士に、不思議な直観が具わっていたことになる。従って、ベッツシイの信頼が正しかったことを示す。ディケンズは無邪気な人の直観を愛していたのではないだろうか？

② デヴィッドは新妻ドラの幼ない言動に閉口して、ベッツシイ伯母に妻に忠告してくれるように頼む。伯母は助言を断わり、自分の結婚生活を反省する言葉をもらす。(第44章) ベッツシイの反省のなかに、ディケンズの体験(初婚の失敗)を照応するのは、簡便な考証である。ここではディケンズを職人的な小説家として扱ってみたい。ベッツシイの破婚にからむ反省は、意味があるとしても、怪しげな旁系人物を省略する方が、近代小説のリアリズムとしては自然である。

デヴィッド夫婦の生活がままごとじみて、夫の方は次第に日常的な不便を痛感する様子が描かれている。一方、ベッツシイは破婚の経験をもつゆえに、甥の新婚生活を祝福しながら、くらい過去を想わずにはいられない。作者はこの初老の独身婦人の内心のくらさを、やくざな前夫を登場させることで、肉づけを心がけたのではないか。——としても、事件の重層化は読者大衆の嗜好に適合するので、このワキ筋は、結局、読者へのサーヴィスを狙ったものと、考えてよいのではないか？

(iii) Thomas Traddles と牧師の娘 Sophy との結婚過程(Traddles と David は、少年時代に、Creakle 校長の圧制的な私立学校で共に学んだ。代言人 Traddles は、Picawber と共同して、Uriah の悪事を摘発)

このワキ筋の進展は詳細にすぎる。Sophy の家族環境のうち、彼女の姉 'the Beauty' (通称) の結婚の失敗談は、まったくの夾雑物である。Traddles が妻の姉妹を好遇する状況は、彼の少年期以来、一貫した人柄のよさを示すためであろう。また、それは大衆の濃厚な好奇心に、たぶん、適合

したであろう。それゆえに、このワキ筋も読者サービスのため、としか思われぬ。

伏線をふくめて、構成上の、特に Sub-Plot の検討は、ディケンズの場合、彼の職人としての腕の確かさを、あらためて証明する結果になる。それと共に、少なくとも、この小説に限って言えば、終始一貫、彼は読者大衆の好みを意識して、書きすすめたと考えられる。

卒直に言えば、ぼくは『デヴィッド』を精読して、数十名の人々の人生が、このなかに息づいていることに感服しながら、作者の志の高さを窺うことができなかった。すなわち、作者の思想性の貧しさである。これはすでに周知のことかもしれぬ。

性格描写について 主人公デヴィッドの性格について、Arnold Kettle は、たぶん、他の論者と角度のちがうみかたをしているようだ。⁽⁷⁾

ケトルの意見によれば、——少年時代のデヴィッドが、ロンドンの酒類問屋倉庫 (Murdstone & Grinby Warehouse) の仕事から逃げだして、ドーヴァーの伯母の家へ行きつくまでの時期 (分量でいえば、この小説のはじめ四分の一) に、いくつかの悲しく恐ろしい経験を経ながら、それらが彼にほとんど影響しない様子に注目する。つまり主人公の心情と思想に根本的な変化がない。これはデヴィッドに「相対的な免疫性」(relative immunity) が具わっているからで、その免疫性とは、彼を困む汚濁に抵抗したり、或はこれを無視したりする素質である。免疫性は Olive Twist にもあるが、オリヴァーの場合、まったく自己主張をしない。デヴィッドは、『大いなる遺産』の Pip のように、しっかりと、(または批判的に) 描写されているのではないが、まぎれもなく、認められる程度に、描写された人となって、つつがなく存在している。デヴィッドの免疫性は、ディケンズによって、まったく意識的にひきおこされ、論議されている。(例として、⁽⁸⁾

デヴィッドが母の死後、<Murdstone たちに虐待されもせず、ぶたれることもなく、ひもじい思いにもあわされたわけでもないが、私に加えられた意地わるさは、絶えまない冷酷な扱いであり、それは故意にしくまれた冷淡なやり口で行われた>『デビッド』第10章) すなわち、この部分の注釈はマードストーン兄妹の酷薄性について記されているばかりでなく、彼らの酷薄性に対処するデヴィッドの態度についても同様に記されているのである。

ケトルはさらに、デヴィッドが外的な打撃に抵抗できる基盤として、次の三点をあげている。

(1) 或る種の根ぶかい紳士きどりの俗物性、すなわち、自分は心ならずも交わっている連中よりも「上位の」ものなのだ、という感覚、かなりひどい苦難に直面したときでさえも、或る社会的な水準を保持せねばならぬという感覚。

(2) 自己のくずれかかる存在条件をつなぎとめられるだけの、倫理的な力として、労働を本来的に尊重する気性。

(3) 想像力に由来する強度の内面生活、それはとりわけ、幼少時代に自分で読んだり、読んでもらった物語りが土台になっている。⁽⁹⁾

上記の三点のうちで、たぶん (1) だけが努力家で空想好きの少年にふさわしい美点として認められるかどうか、この小説の愛読者は迷うかもしれない。私見によれば、デヴィッドには貧しい弱者に対する同情があるにせよ、自尊の気性はたしかにある。(例えば、酒類倉庫で働いていたとき、彼は仲間間の「きたならしい」少年たちに伍することを、いさぎよしとせず、貧乏紳士ミコーバー氏を唯一の親友としたではないか)。しかし、自尊は向上心に通じるので、その意味の「紳士きどり」は、とがめだてするほどの欠点ではない。ぼくは道徳的に主人公の是非論を言いかけているのではない。ケトルの解明が、なるほど、と思われるほどに、この (1) の特性は的中していると思う。これは子供らしくない特性である。さらに言えば、デヴィッ

ド少年は逆境に育ったせい、か、話相手に気をかねて、自己主張をしない場合が多い。(ユライアを相手にするときは格別である。デヴィッド青年は、一度、彼をなぐりつけている)。

デヴィッドは回顧の叙述体で、うぬぼれにちかい自己肯定をすることがある(第11章及び第19章の書き出し)。自己肯定の回想的な独白は、作者の執筆当時の心境に近いものだろう、という「家庭の事情的な」推量をするよりも、内心の自己肯定と、生活の場での自己主張とが、少年期のデヴィッドの場合、なぜ結びつかなかったか? ケトルの論法を適用するならば、それはデヴィッド少年の生活の知恵であった、と解釈してよい。十才の少年が経済的に独立せねばならぬという、異常な生活の場で、その知恵は身についたのであろう。作者は、デヴィッドの内心を、この点に関して、なんら掘りさげた叙述をしてはいない。一人称叙述で書きすすめながら、回想部分で、この心情をとらえようとしめない。回想部分の調子は、安全地帯の自足感と、あまい感傷である。これはぼくには大いに不満である。

こうもいえよう。ディケンズは「みる作家」として、外側から人間をとらえる。性格描写は会話と風貌・動作の面から行われる。及び戯画調は鳥獣その他の動物、または動きのない無性物をあしらった直喩や対照法で構成される場合が多い。(これらの技法についての検証は次の機会にゆずっておく)。

外的な性格描写は、発展小説にふさわしい叙述方法ではない。ここで、ぼくは本稿のふりだしに戻ったようである。

二十世紀の小説理論の神経過敏性が、小説の面白さを圧殺し、小説の自由を制限しているかにみえる。視点の問題に作家と職業的な小説批評家の注意が集中し、前衛作家を自任する青年たちが、ストーリーを否定する傾向がつよまるとき、ディケンズの小説が、実作者たちに冷遇されることはあきらかである。いや、すでに、そういう時期を彼の文学は通り抜けて、

新しい評価を待っているのだ、といってよいだろう。

暗示的な観測——彼の「誇張」と戯画手法を、ゴッゴリのそれとくらべるとき、新しい光をはなはししないか？ 現代寓話の手法として、それは衣更えできるのではないか？ 現在の性格描写の軽視は、社会的な条件の現われとも考えられる。しかし、文学の「新旧」は、時代の好尚の推移によって顛倒しないでもない。とすれば……？

Notes

- (1) G. K. Chesterton: *Application and Criticisms of the works of Charles Dickens* (初版 1911, 重版 1966, Kennikat Press) p. 129
- (2) S. モーム (西川正身訳) 『世界の十大小説』上巻, p. 1~2 (岩波新書, 昭 33)
- (3) F. R. Leavis: *The Great Tradition* (初版 1948, 紙装版 1962, Penguin Books) p. 249
- (4) ◆Lauriat Lane: *Introduction: Dickens and Criticism (The Dickens Critics, edit. by G. H. Ford & L. Lane, Cornell Univ. Press, 1961 収録)*
 ◆John gross: *Dickens: Some Recent Approaches (Dickens and the Twentieth Century, edit. by J. Gross & G. Pearson, Routledge & Kegan Paul, 1962 収録)*
- (5) “You would like to be a lady?” I said, Emily looked at me, and laughed and nodded “yes”.
 “I should like it very much. We would all be gentlefolks together, then. Me, and uncle, and Ham, and Mrs. Gummidge. We wouldn't mind then, when there come stormy weather,……” (*David Copperfield*, ch. 3)
- (6) “Don't you think that”, I asked the Coachman, in the first stage out of London, “a very remarkable sky? I don't remember to have seen one like it”.
 “Nor I—not equal to it”, he replied, “That's wind, sir. There'll be mischief done at sea, I expect, before long”. (D. C. ch. 55)

- (7) Arnold Kettle: *Thoughts on 'David Copperfield'* (from *A Review of English Literature*, published by Longmans, Vol. II, No. 3, July 1961)
- (8) Kettle の発言の一部分—This immunity (of David) is not quite the same as, in an earlier book, *Oliver Twist's*. Oliver never really asserts himself as a person at all. But David is there all right, not as firmly (or critically) delineated as Pip but undeniably and quite recognisably someone, and the immunity is quite consciously evoked and discussed by Dickens. When David writes (of the period at Blunderstone just after his mother's death)

I was not actually ill-used, I was not beaten, or starved, but the wrong that was done to me had no intervals of relenting, and was done in a systematic, passionless manner.

the note is caught not only of the Murdstones' cruelty but of his own attitude to it, (*Ibid.* p. 69~70)

- (9) First, a certain deep social snobbishness, a sense of being 'above' the people he is thrown among, and of a need to maintain, even in the face of almost impossible difficulties, certain social standards; secondly, an ingrained respect for work as a moral force, capable of holding together the disintegrating elements of existence; and, thirdly, an intense inner life of the imagination based, above all, on the stories read by and to him in early childhood. (by Kettle; *Ibid.* p. 70)